

ちひろ美術館・東京
美術館だより

No.225

2025.7.14



戦後80年 ちひろと世界の絵本画家たち 絵本でつなぐ「へいわ」

2025年7月26日(土)～10月26日(日)

主催：ちひろ美術館

後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、杉並区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区

協力：童心社、福音館書店

日本の敗戦から80年を機に開催する本展では、当館のコレクションを中心に、世界の絵本画家たちが平和への思いを込めて描いた絵本を紹介しします。世界ではこの80年の間にも、戦火が絶えることはありませんでした。今もウクライナや中東など、世界各地で戦争や紛争が続く、子どもたちに深刻な影響を与えています。第二次世界大戦後、もっとも多くの紛争が発生しているといわれるいま、絵本を通して、さまざまな角度から平和について考えます。本展開催にあわせて出品作家から寄せられたメッセージの一部を紹介します。(上島史子)

*展示内容については「安曇野ちひろ美術館美術館だより No.116」をご参照ください。

ユゼフ・ヴィルコン (ポーランド 1930ー)



ユゼフ・ヴィルコン「すきすきだいすき ブルーのフロボーズ」(セーラー出版)より 1991年

戦争が始まったとき、私は9歳だった。1939年9月1日。ドイツがポーランドに侵攻した。その数日後、ヴィエリチカに爆弾が何発か落とされた。私のボグチツァの家の窓から爆弾が炸裂するのが見えた。幸いにも、操縦手が的を外し、爆弾は町の外で爆発した。そこは私が通っていた学校から約1kmの場所だった。

9月の末、ワントツに国境を越えてやってくる最初のドイツ兵たちを見た。両親と子ども3人の私たち家族は、そのとき祖父の家にいた。多くのポーランド人がそうしたように、私たちは東へ、ドイツ兵から逃げた。

こうしてドイツの占領が始まった。

父はしばらくして、地下抵抗組織に加わった。兄はバルチザンの仲間に入った。9歳の少年だった私も、抵抗組織に連絡係として参加した。同時に、母が家を切り盛りするのを手伝った。

占領期の最も衝撃的な体験は、ドイツ兵がポーランドに住むユダヤ人の大量殺戮を始めたことだった。ユダヤ人を助けたり隠したりすることは死刑を意味した。私の家族はユダヤ人を隠す手助けをした。私たちは幸運だった。何度かま

に数分の差で、死と隣り合わせになった。

こうした衝撃的な出来事にも関わらず、私たちは戦争を生き抜いた。戦争のトラウマや消えない傷を負うことはなかった。今、当時の記憶をさかのぼると、同時に私はすばらしい子ども時代を過ごしたことに気づくのだ。同世代の仲間たちとの遊びや自然との触れ合い。小学校の先生は初めての静物画を描くための手ほどきをしてくれた。当時から画家になることを夢見ていたが、まだ先のことはわからなかった。後に日本で展覧会を開催し、たくさんの絵本を出版し、私の絵が美術館に収蔵される日が来るとは、そこで多くの人と出会い、友情をはぐくむとは、どうして想像できただろう？

ユーリー・ノルシュテイン (ロシア 1941ー)



ユーリー・ノルシュテイン&フランチェスカ・ヤールブソフ「きつねとうさぎ：ロシアの昔話」(福音館書店)より 2003年

何千年にもわたり、芸術による創造は、戦争による破壊とは対極のものでした。戦争は、他人の土地や命を貪欲に奪う手段です。

芸術は、存在の普遍的なドラマ、その喜びと幸福を、血を流すことなく表現したものです。おとぎ話は人生の師です。生きて、考えて、苦しむ人々のために、芸術は道を開きます。民謡、童謡、神話、玩具、民間儀式、偉大な芸術家の作品、歌舞伎、チェーホフ、シェイクスピア、セルヴァンテス、芭蕉(3行でなんと多くの意味を持たせることか!)など、人が創造したすべてのものに生命が宿っています。

(中略)ちひろの作品には、世界が私たちに与えてくれるあらゆるものが息づいています——太陽の光、海や雨の音、子どもたちの遊ぶ声、動物への愛情、親しみのある歌、いのちの神秘をのぞくこと。

フランチェスカと私は、戦争をテーマとした映画を一本だけつくっています。

『話の話』です。同時にこの映画は人生から欠けると平和でなくなってしまうものについても語っています。それはシン

ブルで、助け合いの気持ち、旅人が歩く道、食卓につく家族、食事への招待、木、葉のざわめき、沈む太陽、日々の仕事——。しかし、私たちの日々の暮らしの本当の意味を見つけるのはなんと難しいことか。

思想家の安藤昌益*は、封建的な社会を反自然的な「法世」とみなし、法世を自然の世に高めるために、すべての人が労働に携わるべきだと語っています。こうも語っています。「人は上も下もなく、貪り取るものも取られるものもなければ、恨み争うこともない。これが自然の世の有りようだ。」

共に働こうではありませんか！

クラウディア・レニャッツィ (アルゼンチン 1956ー)



クラウディア・レニャッツィ『わたしの家』より 2001年

困難な今の時代、世界に届けたい平和のメッセージは、想像力に富んだ芸術性の高い本や物語を子どもたちに手渡そう、ということです。人を愛し、異なる人たちへの攻撃や差別をしない子どもを育てるために。平和を愛する心を育んだ子どもは、大人になっても平和を望みます。私の絵本は、想像力があれば、夢のような旅ができることを伝えています。

私は子どもたちがデジタルの画面を見る時間を減らし、本を読んだり絵を描いたり、物語をつくったり、友だちと遊ぶ時間を増やしてほしいと望んでいます。それが、よりよい将来を開く唯一の道だと思います。

アンドレア・ベトルリック・フセイノヴィッチ (クロアチア 1966ー)



アンドレア・ベトルリック・フセイノヴィッチ『いつか空のうえで』(小学館)より 2001年

戦争。私は戦争が大嫌い。そして子どもたちや、あらゆる人々の苦しみも。

*安藤昌益(1703～1762年)江戸時代中期の日本の医者、思想家。

私は自分の国で起きた1991年から1995年の独立戦争を覚えています。家を捨てて長い列に並ばなければならなかった、怯えて混乱した人々の光景。足の不自由なお年寄りが目に涙をため、長い人生を過ごしてきた家を後にしなければならませんでした。そして知らない土地へいかなければならなかったのです。くまのぬいぐるみをやっと持ち出し、泣いている子どもたち。スーツケースには、それを運ぶ人々の一生が詰まっていた。叫び声、恐怖、泣き声。

ヴコヴァルはクロアチアの苦しみと、暴力への抵抗の象徴となった町です。町は1991年の11月18日に陥落しました。そのとき大きな心の痛みを感じました。亡くなった多くの方々への心の痛み、そして私も知っている、愛する人々たちを失った方々の心の痛み。私も10歳のときに母を亡くしているからです。そして、子どもたちの苦しみに非常に心が痛みます。戦争と憎しみは、私には理解できません。

私のすべての絵本は、子どもたちに関わる問題を扱っています。(中略)『いつか空のうへで』は私自身についての絵本です。母を失った小さい女の子のお話。女の子は母親との楽しかった時間をみんな覚えていて。(中略)

私は幼かったとき、自分の描いた世界に住んでいました。大人になって、現実の世界は絵のなかの世界とは違うことに気づきました。だから私はずっと描き続けようと決めました。

私の望みは、自分が絵に描くような、戦争も、悲しみも、孤独もない、幸せと愛に満ちた、子どもたちが幸せに暮らせる世界に住みたいということです。(中略)私は自分の人生を、子どものための芸術に捧げます。

ウェン・シュウ
(コスタリカ 1976—)



ウェン・シュウ「ナディとシャオラン」より 2008年

今日ほど、多様性が不可欠で貴重だと

痛感する時代はないように思います。

皮肉にも、この急速なグローバル化の時代は、より多くの分断をもたらしています。多くの人々が混乱し、ときには恐れさえ感じています。そして、私たち人間は孤立しがちで、自分たちと異なる人々を「よそ者」と見なしてしまします。

自分自身や、身近な人、そして世界の人々を知ることは、だれもが愛とコミュニティを必要とする点で、驚くほどよく似ていることに気づくための第一歩です。それぞれの違いから学ぶこともたくさんあります。自分とは異なる新しい友人をつくることで、探求し、魅了され、学び、そして恋に落ち、豊かな思考と感情の世界へ繋がることのできるのです。

生きる喜びにあふれた機会をとらえ、歩みを緩め、心を開いて、周りのすべての人と、つかの間の出来事に感謝しましょう。

ボロルマー・バーサンスレン
(モンゴル 1982—)



ボロルマー・バーサンスレン「ぼくのうちはゲル」(石風社)より 2004年

一般に人はおだやかで平和な環境で暮らすことを願います。その願いがかなわないのは、社会、慣習、文化など取り巻く環境にも理由がありますが、そのなかでも大きな理由は、人の心にあるようです。現代の人びとは、あまりにも物やお金に執着しているように思います。

モンゴルの遊牧民の生活の特徴は、自然との共存です。遊牧民は、気候や草の生え方に応じて、一年に4回から10回も移動して暮らさなくてはなりません。そのため必要最低限のものだけを持って暮らしてきました。

モンゴル人には、「家畜を飼っていれば口がうるおう」ということわざがあります。遊牧民の家庭には、ゲル(移動式住居)、物入れ、バケツ、鍋など300個くらいの持ち物しかありません。それらをほんの数時間のうちに荷にまとめ、新たな土地へと移動して暮らします。今でいうなら、自然を愛するミニマリストの暮らしといえるでしょう。

このような生活において、人々は平和でおだやかな暮らしを営んでいたようにみえます。ですが、今やモンゴル人の90%が定住生活をするようになり、物質的な豊かさに価値をおくようになりまし

た。新しい家、車、流行のファッションや物、お金でいくら追い求めても、その欲望には終わりがありません。

でも、このところ、世界で再びミニマリストの生活に注目が集まってきているのはうれしいことです。ミニマリストの暮らしは、私たちの心に安らぎと平和をもたらしてくれると思います。

伊藤 秀男
(日本 1950—)



伊藤秀男「けんかのきもち」(ポプラ社)より 2001年

僕のおじさんはサイパンで戦死し、その弟のおじさんは、シベリアの収容所で病死した。おじさんたちが帰ってくるはずの家を妹の母がようやく養子を迎えて継ぎ、僕が生まれた。僕は上のおじさんと同じ名をもらった。一字変えて。「ヒデオがかえってきた」とおじいさんは喜んで隣近所に赤飯を配ったという。日本の戦後5年目の1950年の春の事であった。時折母がふいに語り出した戦争で死んだ二人のおじさんの話は、僕の心に深く残った。

nakaban
(日本 1974—)



nakaban「ひとのなみだ」(童心社)より 2024年
(個人蔵) *特別出品

ああ、ひとに涙があって良かった。ひとが涙を持たない心になってしまえば、その視界から色彩が失われる。

ひとは数字のために生きようになり、ものごとの優劣の判断を簡単に考え、そのひとが知らないうちに、多くのひとの心を身体もろとも殺してしまうかもしれない。

だからそろそろ自分の内側の涙の水源を探す旅に出る時だ。その涙の一滴が美しくあって欲しいなんて願わなくていい。それは美しいものに決まっているのだから。

「ちひろのアルバム」関連イベント

2025年3月20日（木）・29日（土）スライドトーク 写真から見るいわさきちひろ

「ちひろのアルバム」展関連イベントとして行ったスライドトークでは、初公開を含む写真90枚を映しながら、ちひろの人生についてお話ししました。一部を紹介します。（中平洋子）

いわさきちひろの「写真資料」とは

ちひろ美術館では、ちひろ作品9,700点のほか、ちひろにまつわる資料も多数所蔵しています。作品に次いで点数が多いのは、ちひろに関する写真資料です。60冊以上の遺品アルバムや古い封筒に残された写真に加え、ちひろの死後、知人や親せきから提供された写真をあわせると5,045点にも上ります。

写真の種別で最も多かったのは、4割強を占める旅行写真。次に多かったのは、息子の成長記録や親族・友人との日常を写したものでした。被写体別では、夫749枚、ちひろ1,179枚、そして息子が最も多い1,333枚でした。

気に入った写真を大きく引き伸ばしてページ中央に貼ったり、トリミングして連続写真のように見開きいっぱいに美しく配置するなど、ちひろは写真の構図だけでなくアルバムづくりそのものにも、随所に工夫を凝らしています。

これまでも写りのよいものを展覧会や出版物などで折々に紹介してきましたが、没後50年を機に、すべての写真の来歴・撮影場所・被写体などを調査するとともに、前後の写真との関連も丹念に拾い、全貌を初めて把握することができました。また全点をデジタル化して画像データベースに登録し、今後のさらなる調査研究にむけて環境を整えました。

生活のなかで生まれる絵

1954年のアルバムを見ると、夫が弁護士活動を開始し、最初の仕事として近江絹糸の労働争議を担当することがわかります。ちひろ自身も展覧会への出品、紙芝居・童話・民話の挿絵など、活動の幅が広がり多忙なようです。それでも夫の出張と時期をあわせ、少なくとも2回、息子同伴で近江絹糸の大垣工場（岐阜）や津工場（三重）へ赴いています。自分たちの権利のために闘う労働者のようすを取材し、たくさんの写真やスケッチを残すなど、ちひろは社会へのまなざしを忘れていません。そして9月、近くにてきた4年保育の幼稚園に、3歳になった息子が1期生として入園します。

1956年のアルバムに登場するちひろは、夫の弁護士事務所主催の運動会を家族や親せきと楽し（①）、次ページでは正装して小学館児童文化賞の賞状を受け取り（②）、さらにページをめくっていくと5歳の息子の木琴の練習にやさしく寄り添っています（③）。

「私なん



①



②



③

か、独身だったら気楽で、絵もバンバン描けるだろうと考えられるけど、とんでもないですよ。夫がいて子どもがいて（中略）ごちゃごちゃのなかで私が胃の具合が悪くなって仕事をしていても、人間の感覚のバランスがとれているんです。そのなかで絵が生まれる」とちひろ自身が語った通り（注）、ちひろの作品が生活のなかで生まれたことが、写真資料からもよくわかります。

写されなかったもの・残らなかった写真

絵と違い、写真はカメラのレンズがとらえたありのままを写します。今回の調査では、写っている人物やペット、背景などを手がかりにほかの写真との関連を発見し、撮影時期や場所の特定に繋げるなど多くの事実を明らかにすることができました。一方で、ちひろが最初の夫との写真や、旧満洲の開拓団での写真を一部アルバムから剥がし、ページによっては上から違う写真を貼りなおしていたことも判明しました。また1967年には、遠く広島まで原爆被害の取材に行きながら、写真をわずか4枚しか残していません。「写真がない」という事実から、ちひろの複雑な心境を推し測ることがができます。写真が伝えるのは、ちひろの人生のほんの一部に過ぎないのだ、というあたりまえのことに気づかされました。

注：「＜対談＞いのちを守る」より（『教育評論』日本教職員組合1972年11月号）

ちひろの写真資料約2,200点を掲載した

『いわさきちひろ写真資料目録』は、研究目的の方に実費でお願いします。詳細はQRコードをご参照ください。



「アンデルセン生誕220年 ちひろと見つめるアンデルセン」関連イベント

2025年6月15日（日）紙芝居で楽しむアンデルセン童話

展覧会に関連して、ちひろのエピソードとともに紙芝居を楽しむ会を行いました。当日は幅広い年代の方が集まり、図書室はにぎわいました。



大正時代から昭和初期にかけて普及した紙芝居。第二次世界大戦中には戦意発揚の道具として使われた側面もありました。その反省のもと、敗戦後には子どものための文化として新たに広める動きが起きます。絵本や童話集を中心に、ア

ンデルセンの物語の描き手として活躍したちひろが、最初に手がけたのは紙芝居でした。ちひろが絵を描いたアンデルセン原作の紙芝居は4作あります。そのなかから2作を紹介しました。

『おかあさんのほなし』（童心社）

上演したのは、アンデルセンの原作をもとに稲庭桂子が脚本を書いた作品です。上演前にちひろのエピソードを紹介しました。ちひろは、まだ新聞記者をしていたときにこの紙芝居の依頼を受けています。後年、全力で取り組んだ制作当時は振り返り「しあわせでたまりませんでした」と語ったこと、これをきっかけに絵を仕事にすると決めたことや、ちひろと稲庭がその後も多くの仕事をともに

したことなどをお話ししました。

紙芝居が始まると、お母さんが必死にぼうやを呼び、死神に訴えかけるようすに、子どもも大人も真剣に耳を傾けていました。

『お月さまいくつ』（童心社）

続いて、「絵のない絵本」の第22夜をもとに描かれた作品を上演しました。展示室で原画を見てから参加された方もいたようです。幼い兄と妹が仲直りするシーンでは、紙芝居のなかのお月さまと同じように会場にも笑みが広がりました。

参加者からは「子ども向けと思って参加したが、大人としても楽しめた」「作品の背景も聞いて理解が深まった」などの声が寄せられました。（藤澤恵）

ひとこと ふたこと みこと



4月27日(日)

北海道の田舎から上京してはや2か月。常に周りに人がいる騒がしい生活にも慣れましたが、ここの静けさはとても落ちつきます。ちひろさんのあたたかな絵に囲まれて心が安らぎました。 瑞希

5月2日(金)

韓国からやってきました。ヘウォン、キョンウォン、ジヒョン、ピョンナン、ちひろに会いに…

(※原文は韓国語)

5月9日(金)

ちひろさんの新たな原画が生きている間に7点も見られて本当に幸せです。お空のちひろさんも、善明さんといっしょに、絵が戻ってきて喜んでいと思います。S.K.

5月21日(水)

何年もかかりやっと台湾からここ

に来る機会に恵まれました。小さくも美しい美術館でちひろの作品を見ることができ、こじんまりと静かで落ち着いたところで素晴らしい体験ができました。

Joseph Wang(※原文は繁体字中国語)

6月6日(金)

福岡から孫の顔を見にやって来ました。石神井公園の散策に出かけるとき息子からちひろ美術館のことを聞いて、足を延ばしてみました。いつかちひろ先生の絵本を生まれたばかりの孫が読んでくれる日のことを願って… 結花

6月7日(土)

ぐるっとバスを使い、初めて来館しました。ちひろさんが50代で亡くなっていることも知らないくらい無知でしたが、その人生にたくさんのやさしい作品を遺されていて

てすごいいい思いました。ありがとうございました。

6月8日(日)

新人ナースです。ちひろさんの絵を見てこのノートを読んで、心が洗われました。また頑張れそうです。今は関係が良くないけれど、いつか母と訪れたいです。ありがとうございました。 N.E.

6月12日(木)

今年7月30日で70歳。ここには今日初めて来ました。とてもゆったりと自然のなかで楽しみました。今日も息子といっしょにゆっくりと回りました。若いころちひろ全集を買いました。一番大きな買い物…それが生きていく支えとなりました。平和を祈りながら！やさしい絵、美しい絵を見ながら心がやさしく強くなりました。 眞由美

美術館 日記



4月26日(土) ☀

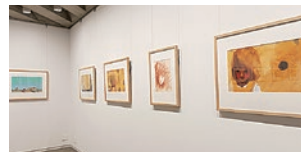
今日からゴールデンウィークがスタート。心地良い気候にあわせて、絵本カフェでは中庭にテラス席を出し、期間限定ドリンクの提供を始めることに。涼やかなグラスドリンクはシロップの色層も目に楽しく、味わいながらゆったりと過ごす方が多かった。



5月19日(月) ☁

マスコミや関係者に向けた内覧会の開催にあわせて、司修さんが来館。「昨日から緊張しているんですよ」と会場の参加者に微笑みかけながら、絵本『まちんと』や展示作品にまつわる想いを語った。

ウクライナやガザなど戦争は絶えず、核の脅威が続く今という時代のなかで、展示タイトル「ヒロシマとマト」をどのように考えたかは、岩波書店の月刊誌「図書」(7月号)に書かれたとのこと。刊行を楽しみに待ちたい。



5月20日(火) ☀

「みる・よむ・体験する ねりまフォーラム実行委員会」の中核館として、かねてより準備を進めてきた文化庁令和7年度 Innovate MUSEUM 事業が、採択通知を受けいよいよ本格的に始動。今年度は、療育を必要とする親子に向けた地域ネットワークの形成と、

芸術文化施設を起点とした子どもを育む環境の涵養を目標に、研修会や市民講座、ワークショップ等の開催を予定している。

6月7日(土) ☁

今年も、都立大学建築学科の学生30名に向けて、たてものツアーを行った。設計者・内藤廣が建物に込めた思いや工夫、建材の特徴などを紹介すると、引率教員からもさらに専門的な解説があり、ゼミ生だけでなく職員にとっても大切な学びの場となっている。

6月15日(日) ☀のち

来年、再来年の展示企画案の締切日。両館職員全員が企画書を提出した。2027年は東京館が開館50年、安曇野館は30年となる節目の年。半世紀にわたる館のあゆみとコレクションの魅力を伝える展示の企画が始まる。

風

Vol.13

旬なできごとをピックアップしてお届けします

80年前の1945年8月6日の朝、広島に原子爆弾が落とされました。

広島で原爆を体験した子どもたちの手記に、いわさきちひろが絵をつけた『わたしがちいさかったときに』(童心社)が「若い人の絵本シリーズ」の1冊として出版されたのは、1967年。冷戦下の世界は核の脅威にさらされ、ベトナム戦争は拡大、日本国内の米軍基地から軍用機がベトナムに飛び立っていきような時代でした。戦後22年の当時でさえ、戦争の記憶の風化を食い止めないといけなく、とちひろは切実に思い、手記のために絵を描きました。^{*1}

原爆投下からも第二次世界大戦の終結からも80年となる今夏、

『わたしがちいさかったときに』に込められた思いを次の世代につないでいく絵本『1945年8月6日 あさ8時15分、わたしは』(童心社)が出版されます。^{*2}

ことばは、原爆を体験した子どもたちのほか、作家あまんきみこさんと詩人アーサー・ビナードさん、当時の手記を書いたひとり小川俊子さんによるもの。絵は、いわさきちひろ。『わたしがちいさかったときに』のために描かれた作品のほか、花や子どもを描いたカラーの作品を組み合わせ構成されたこの本は、「今日、あさ8時15分、あなたは何をしていましたか」と数時間前の自分を振り返ることばから始まり、1945年8月6

日の朝から1967年、2025年、そして未来へと、私たちの記憶と願いをつないでいきます。

戦後70年(2015年)時点で、広島に原爆が落とされた日を正確に答えられたのは、全国で3割程度だったそうです。^{*3} 戦後80年の今では何割くらいでしょうか。

戦争や紛争により核の脅威が再び高まっているといわれるなか、戦争被爆国に生きる私たちができること、すべきことは何でしょうか。この本が、今を生きる子どもたちが原爆に向き合い、平和をつないでいく意味を考えるきっかけになればうれしく思います。もちろん、大人である私たちも真摯に向き合っていきます。(武石香)

●次回展示予定

2025年10月31日(金)～2026年2月1日(日)

装いの翼

—いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子

いわさきちひろ(1918-1974)、茨木のり子(1926-2006)、岡上淑子(1928-)は、第二次世界大戦後、それぞれ絵本画家、詩人、美術家として独自の表現を切り拓きました。本展では、2025年9月刊行予定の行司千絵・著『装いの翼 おしゃれと表現と—いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子』(岩波書店)を起点として、『装い』をテーマに3人の女性作家の素顔に迫ります。それぞれの作品とことば、愛用の品や写真などを展示し、三者三様の美意識や生き方と、自由と平和を求める共通の思いを浮き彫りにします。



いわさきちひろ
白いマフラーをした
緑の帽子の少女
1971年

ちひろ美術館・東京イベント予定 各イベントのご予約・お問い合わせは、ちひろ美術館・東京イベント担当へ。

掲載内容は予告なく変更する場合があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください。お電話にてお問い合わせください。

TEL.03-3995-0612 chihiro.jp



戦後80年 ちひろと世界の絵本画家たち 絵本でつなぐ「へいわ」 展示関連イベント

●松本猛ギャラリートーク

○日時：7月27日(日) 14:00～14:40
○講師：松本猛(ちひろ美術館常任顧問)
○参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要

●アーサー・ピナード(詩人)講演会

○日時：8月3日(日) 14:00～15:30
○講師：アーサー・ピナード(詩人)
○会場：【ちひろ美術館・東京】定員：40名/参加費：1000円(入館料別)
【オンライン】定員：100名/参加費：700円
○申し込み：要事前予約(7月3日(木)より公式サイト、TEL.にて)

●Silent Fallout 上映会

○日時：8月30日(土) 13:30～
○会場：ちひろ美術館・東京
○申し込み：要事前予約(7月30日(水)より公式サイト、TEL.にて)

●対談 武田美穂(絵本画家)×松本猛(ちひろ美術館常任顧問)

○日時：9月14日(日) 14:00～15:30
○会場：【ちひろ美術館・東京】定員：40名/参加費：1000円(入館料別)
【オンライン】定員：100名/参加費：700円
○申し込み：要事前予約(8月14日(木)より公式サイト、TEL.にて)

●内田麟太郎(詩人・絵詞作家)講演会

○日時：9月28日(日) 14:00～15:30
○講師：内田麟太郎(詩人・絵詞作家)
○会場：【ちひろ美術館・東京】定員：40名/参加費：1000円(入館料別)
【オンライン】定員：100名/参加費：700円
○申し込み：要事前予約(8月28日(木)より公式サイト、TEL.にて)

●新刊『1945年8月6日 あさ8時15分、わたしは』

言葉／原爆を体験した子どもたち
絵／いわさきちひろ
童心社 定価1,870円(本体1,700円+税10%)
時をこえて当時の子どもたちと出会い、わたしたちは今日を、明日をどう生きるのかをともに考える絵本です。



〈会期中のイベント〉

●ちひろ忌・アトリエトーク

○日時：8月8日(金) 14:00～ ○参加費：無料(入館料別)
○申し込み：不要

●ちひろの水彩技法体験ワークショップ
にじみのキーホルダーをつくろう

○日時：8月20日(水)、21日(木)
10:30～15:00(予定)
○対象：5歳以上 ○定員：各日50名(先着順)
○参加費：300円(入館料別)
○申し込み：当日10時より受付、先着順



●開館記念日 たてものツアー

○日時：9月10日(水) 14:00～
○参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要

●敬老の日

○日時：9月15日(月・祝)
○65歳以上の方は無料でご入館いただけます。

●出張「子育てのひろば」

○日時：9月17日(水) 10:00～15:00
○参加費：無料(入館料別) ○共催：NPO 手をつなご

●わらべうたあそび

○日時：9月20日(土) 11:00～11:40
○講師：服部雅子
(西東京市もぐらの会代表・
はとさん文庫主宰)
○対象：0～2歳児と保護者
○参加費：無料(入館料別)
○申し込み：要事前予約
(8月20日(水)より公式サイト、TEL.にて)



●ギャラリートーク

○第1・3土曜日 14:00～14:30
○参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要

●絵本のじかん

○第2・第4土曜日 11:00～11:30
○参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要
○協力：NCBN(ねりま子どもと本ネットワーク)

CONTENTS 〈展示紹介〉戦後80年 ちひろと世界の絵本画家たち 絵本でつなぐ「へいわ」…②③／〈活動報告〉スライドトーク 写真から見るいわさきちひろ／紙芝居で楽しむアンデルセン童話…④／ひとことふたことみこと／美術館日記／風…⑤

美術館だより NO.225 発行 2025年7月14日

ちひろ美術館・東京